

私が考える検査技師の未来像

◎白石 優作¹⁾国民健康保険 小松市民病院¹⁾

はじめに

我が国は先進諸国の中で少子高齢化の先頭ランナーであることはもはや言うまでもありません。この人口動態に対応していこうと、あらゆる産業構造にも変化が起きてきています。政府は2023年に掲げた「医療DX令和ビジョン2030」を推進させ、“人による判断”や“現場感覚”を必要としなくなる環境作りを目指しています。我々臨床検査技師が働く現場にも、デジタル革命により革新的な技術が持ち込まれつつあることは皆さんが感じておられるのではないのでしょうか。つまり、AIが臨床検査技師の職域を侵すのではないかという懸念です。現状、技術も法体制も倫理的な土壌なども、整うまでにはまだまだ年数を要しそうですが、いずれ普及するのは間違いありません。私が臨床検査技師の未来として予想している姿は、「AIに置き換えられる臨床検査技師」ではなく、「AI時代に不可欠な臨床検査技師」です。

以下に主な役割を整理します。

1.AI リテラシーへの期待

検査結果の解釈だけでなく、AIによって提示された診断候補や予測の、意味や限界について理解している能力への期待があると思います。

2.AIによる自動化の補完

検体検査や画像解析、生理機能検査の一部はAIによって自動化されつつありますが、まれな異常や例外的な事例の判断・検証には人の目が不可欠です。AIが提示する結果のダブルチェックや再検査の判断などの役割があります。

3.検査の品質保証と精度管理の高度化

自動化が進むほど、機器やシステムの不具合に気づきにくくなるため、精度管理・品質保証の専門家としての技師の価値は高まるものと思われます。

まとめ

私はAI時代において、過度な効率化や標準化が進むことを懸念しています。AIが提供する検査数値や画像解析の結果に頼りがちになり、AIを使った技術だけを医療と勘違いする臨床検査技師にはなりたくありません。果たしてそれで患者や家族の満足度が上がるのでしょうか。免許がなくともできる仕事をAIやロボットの助けを借りて行い、人間にしてほしいことは人間が担うべきだと思います。患者や他職種、市民と心の通ったコミュニケーションのとれる臨床検査技師こそ「AI時代に不可欠な技師」であり、皆さんと共に目指していきたい未来像なのです。

臨床検査技師の現状とこれから

◎吉田 淳史¹⁾
富山県健康増進センター¹⁾

現在、富山県臨床検査技師会の会員数は約 570 名であり、その中には多くの若手技師も含まれている。そうした若手技師には、今後の技師会活動を支える中核的な存在として、大きな期待が寄せられている。一方で、昨今の「タイパ」や「コスパ」重視の風潮の中、技師会活動に魅力を感じられず、参加に消極的な若手技師も少なくない。本演題では、こうした若手技師の意識に焦点を当て、技師会活動の魅力や参加の可能性について考察し、さらに人員不足や学校教育に関する現状と展望も取り上げる。

未来を築くためのタスク・シフト/シェアの実践

◎村越 大輝¹⁾地方独立行政法人 静岡県立病院機構 静岡県立総合病院¹⁾

臨床検査技師を取り巻く環境は大きく変化しています。「みんなで検査技師の未来のために何ができるか考えましょう。」と言われても、多くの方は「私は関係ない。」「誰かがやってくれるだろう。」と思い、もしかしたらそんなことすら考えないかもしれません。

結局、イメージが出来ないほど大きなことは人任せになってしまいます。私もそうです。では、自分の周りのことはどうでしょうか。関係もあるし、誰も助けてくれません。自分を守るためには努力や自己犠牲は少なからずしているのではないのでしょうか。

「患者さんのために間違えないように努力する。」と「怒られたくないからに間違えないように努力する。」は、結果は同じです。自分のために一生懸命努力することは、結果的に患者さんのためにもなります。私はこれでもいいと思います。

しかし、この努力は仕事をこなすためのものであり、未来を築くためには現状と同じことをしていても何も変わりません。そこで、“検査技師の未来のため”ではなく、“自分の未来のために”というイメージをしやすい大きさの中で自分事として努力をしていくことがポイントだと思います。つまり、「自分が置かれている環境の中で、自分の未来を良くするために努力をしてみませんか？」というのが私の提供するテーマです。

例として今回はタスク・シフト/シェアを挙げています。タスク・シフト/シェアで検査技師の職域は広がりました。これは大きな変化です。日臨技が広げた職域をどうするか、“そこから先”は現場に任されています。私は“そこから先”は臨床医や患者さんの需要に対してなにができるかだと思います。

私は糖尿病療養指導士ですが、CGMの取り付けは誰でもできることを知っています。CGMの取り付けが認められたという面では職域は広がっていますが、そこに大した需要はありません。看護師が忙しいから代わりにやってくれる程度だと思います。CGMで臨床から求められている需要は、膨大なデータを解析して患者さんに教育を行うことです。需要を理解して、行動を起こしていくことが重要になります。当然ながら需要があることができれば自分の強みができて価値が上がります。

このように自分の強みを作るための努力は患者さんのためになり、未来を変える第一歩となります。さらに学会で発表したり、論文で報告したりすることで、気付けば検査技師の未来を変えることができる検査技師になっているかもしれません。

「他人と過去は変えられないが、自分と未来は変えられる。」

AI 共創時代を生きる：変革と進化のキャリアパスをどのように思い描くか

◎市川 潤¹⁾JA 愛知厚生連 江南厚生病院¹⁾

2022年に登場した ChatGPT に代表される生成 AI の飛躍的な進歩は、社会のあらゆる側面に変革をもたらしました。それは臨床検査技師の領域も例外ではありません。AI が画像診断支援やデータ解析など、これまで人間の専門性が求められてきた業務を代替する未来が目前に迫る中、私たちは AI を脅威として捉えるのではなく、共に新たな価値を創造する「パートナー」として認識し、未来志向のポジティブな姿勢で向き合う必要があります。

AI との共存を図る上で、臨床検査技師としての専門性を深めることはもちろん重要ですが、それに加えて、コミュニケーション能力、問題解決能力、協調性、そして倫理観といったノンテクニカルスキルの重要性が増しています。ノンテクニカルスキルは AI が進化しても代替されにくい、私たち人間の強みとも言えます。例えば、AI が導き出したデータを患者さんや他職種にわかりやすく説明する能力、AI の限界を理解し決断を下す能力などは、今後の臨床検査技師に不可欠な能力となると考えられます。

このような時代の変化に対し、愛知県臨床検査技師会（以下：愛臨技）では先進的な取り組みを進めています。コロナ禍において、全国に先んじて Web を活用した講習会を開催したことに代表されるように、愛臨技は変化に柔軟に対応できるのが強みの組織です。今年度は検査総部門準備委員会を立ち上げ、ノンテクニカルスキルに焦点を当て、全人的な能力向上を支援する取り組みを開始しました。

このシンポジウムでは、「AI 共創時代を生きる」というテーマのもと、技術的变化である「変革」と、それに対応した私たち個人の能力向上や役割の「進化」の両側面から、臨床検査技師のキャリアパスをどのように思い描くかについて議論を深めたいと思います。私たちはこの激動の時代に、受動的に変化を待つのではなく、自らの意思で未来を「思い描く」能動的な姿勢が求められています。AI と共に働く未来を具体的に想像し、その中で臨床検査技師がどのように貢献できるか、そして私たち自身がどのように成長し続けるべきかについて、参加者の皆様と共に深く考察したいと考えます。AI の進化を恐れるのではなく、その可能性を最大限に引き出し、臨床検査技師としての新たな価値を創造していくための、具体的なキャリアパスを共に描き出す機会としたいと思います。

チーム医療における臨床検査技師の役割と次世代への展望

－教育現場から見える課題と可能性－

◎松岡 涼太¹⁾
岐阜医療科学大学¹⁾

高度化・多職種化が進む現代医療において、患者中心の医療を実現するためには、専門職間の連携を基盤としたチーム医療が不可欠である。その中で、臨床検査技師の役割も大きく変容しつつあり、従来の“検査データの提供者”という立場から、“臨床に寄与する専門職”として、より積極的に医療チームに参画することが求められている。

私は現在、大学で臨床検査技師の育成に携わるとともに、若手技師として現場にも関わっており、教育と臨床の双方の視点を有している。実際、検査技師が診療科カンファレンスや感染対策チーム（ICT）、栄養サポートチーム（NST）などに関与し、臨床判断や医療方針の決定に貢献する機会が着実に増えてきている。これらは、臨床検査技師がチーム医療の一員として重要な役割を果たしうることを示す好例である。

一方で、教育現場においては「学生のコミュニケーション力の低下」が喫緊の課題となっている。他者との関わりに苦手意識を持ち、対話や意見交換に消極的な傾向は、将来的に多職種協働の障壁となりうる。専門知識や技術の習得はもちろん重要であるが、それ以上に「チームの一員として関わる力」、「他者の立場を理解し、建設的に意見を交わす力」の涵養が、今後の教育においてより重視されるべきである。

このような背景から、学生教育においては、臨床推論に基づく検査選択や結果の臨床的意義を理解する力の育成に加え、専門職連携教育(IPE)を通じて多職種連携を体験的に学ぶ機会の充実が求められる。また、課題解決型学習（PBL）など、主体性と協働性を養う教育手法への転換も重要である。

さらに、今後の臨床検査技師には、ビッグデータやAIの医療応用にも対応しうる情報活用力と臨床的判断力が必要となる。単に「検査を実施する人」から、「臨床データを統合的に読み解く人」への進化が求められる中、大学教育にはそうした次世代人材を育成する責務がある。

本シンポジウムでは、若手技師としての視点と教育者としての経験を基に、チーム医療における臨床検査技師の貢献と今後の可能性、そして教育現場が抱える課題と展望について報告したい。

私なりの小さな働き方改革

◎市川 真嗣¹⁾
伊勢赤十字病院¹⁾

『ワークライフバランス』という言葉は、今の私にとって何が正解か分からないが、ここ最近よく考えさせられるタイミングにきている。文字通り『仕事』と『生活』のバランスを考えて生きていくことが、現代の課題とも言われている。

私自身、今までは仕事にウェイトを置いてきて、それが当たり前と思って過ごしてきた。仕事が楽しくないと、また充実していないと、この先の人生の未来は見えてこないと漠然と思っていた。

しかしながら、ありがたいことに家庭を持つことができ、配偶者の勤務時間変更なども含め、自分なりの働き方に対する考え方を柔軟にする必要があるのではないかと感じていた。

たまたまのタイミングではあったが、私自身が時短勤務を取り入れてみることで、子供への関わり方、また仕事への関わり方が、私の中で少しずつ変化していったように思えた。

私の職場の方々に対して、やはり負担をかけること自体は、申し訳ないと常々思っている。こういった時短勤務を経験した私が、何か感じれたことを含めディスカッション出来たらと考えている。

これからの未来を担っていく若者達にも、是非とも『ワークライフバランス』を考えて、それが取り入れられる環境、職場と一緒に作っていかねばと思っている。やはり残された方々の精神的負担や肉体的疲弊を、どうやって軽減していけるのかが重要かつ難題である。

また同時に、国における『医師の働き方改革』が施行され、医師だけでなく社会全体における『働き方』を考える時代になってきたと感じる。ただ勤務時間を短くして、時間外労働を少なくすれば良いという訳でなく、医療の質を落とさずに継続していく必要がある。本当に必要な検査がオーダーされているのか、今の時間帯すぐに結果を欲しているのか、臨床側の多くが求めていることなのか、などを精査すべきと感じる。そもそも時間外労働が必要であるなら、シフト制など取り入れている施設があるのか、を含め他施設の状況を教えていただく場としたい。